

学会便り : 第36回International Society for Traumatic Stress Studies (virtual conference) 報告

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学認知行動療法研究所 公開日: 2021-04-09 キーワード: 作成者: 中山, 千秋 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1547 |

■ 学会便り

第36回 International Society for Traumatic Stress Studies (virtual conference) 報告

中山千秋
武蔵野大学大学院博士後期課程研究生

今年は COVID-19 の世界的な拡大の影響を受けて、第36回インターナショナル・トラウマティック・ストレス学会年次総会は、実際に参集しての開催はなくなり、WEB上の virtual conference (仮想会議) となった。総会は、2020年11月4日から11月14日まで10日間にわたって開催され、プレミーティングはそれに先立って10月26日からスタートし、多くのワークショップが行なわれた。総会のテーマは“Bridging Science and Practice to Reach Underserved Communities”であり、サービスが届きにくいコミュニティを支援するための科学と実践の橋渡しというテーマである。トラウマ及びトラウマティックストレスに関するサービスを最も必要としているコミュニティや個人に対する支援として、客観的な根拠に基づいたそれらの概念化、評価、予防、介入に焦点が当てられた総会となった。

基調講演は4つ行われ、オープニングは元CBCニュースのジャーナリスト Connie Walker 氏による「先住民族の女性と少女が直面している暴力の危機における世代間トラウマ」の講演であり、米国やカナダでは、先住民族の女性や少女に対する暴力行為がかなり高い割合で発生していること、そしてその問題にどう介入すべきなのかといった問題提起が行われた。また、ケンブリッジ大学の Tim Dalgleish 教授による「外傷後のメンタルヘルスへの診断を超えたアプローチ」の講演では、PTSDの場合に多い併存疾患について、また他の診断であっても PTSD が影響しているものがあることについてのデータに基づく問題提起と、最新の診断を超えたアプローチについての紹介があり、あらためて勉強になった。

また会期中は110以上のライブセッションが行なわれ、COVID-19に関するテーマについても、いくつかのセッションが行なわれた。COVID-19関連の外傷性ストレスに関する世界的な研究に関するシンポジウム、遠隔によるTF-CBTの実践、医療従事者向けのセルフケアやピアサポートについての報告など、臨床において参考になるものが数多くあり、印象的であった。またポスター発表は約600の発表があったが、WEBということもあり、全ポスターを一覧で確認することができ、大変効率よく情報収集できたと感じている。

今回の総会はWEB上の開催であり、米国東部標準時間に合わせてリアルタイムで開催されていたが、多くの講演やシンポジウムは録画され、後日動画で視聴することも可能な状態に整備されている。また、この総会は2021年11月1日までの約1年間継続してアクセスすることができるという、この点も非常に有難い点である。さらに今回の開催方法のメリットとして、これらすべてが自宅や勤務先のPC、あるいは専用アプリ(eventScribe)により、スマートフォンで視聴で

きるなど、場所を選ばず手軽にアクセスできることがある。初めての試みであったが、画期的な総会となったのではないだろうか。またそれぞれの研究者が自宅やオフィスから講演している（ときにご家族の声が聞こえたりする）ところも、親近感がわいた点である。今回、各国の研究者と直接対面することはかなわなかったが、このような形で工夫して総会が開催されたこと、そして約1年間のアクセス期間が設定されたことは、本当に有難いことであった。海外に出張することなく、手軽に落ち着いて参加できるWEB上での開催という形に、可能性を感じた総会であった。